

教育課程等の概要															
(スポーツ科学部 スポーツ科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎能力形成科目	基礎ゼミナール	1前	2			○			3	3	3				
	情報処理基礎Ⅰ	1前	2			○					1			兼2	
	情報処理基礎Ⅱ	1後	2			○					1			兼2	
	コミュニケーションと音声表現	1前		2		○								兼1	
	コミュニケーションと文章表現	1後		2		○								兼1	
	防災・減災と生活（磐田市）	1後		2		○								兼1	
	教養講座A	1前		2		○								兼1	
	教養講座B	1後		2		○			1						
	教養講座C	1前		2		○								兼1	
	高大連携プロジェクトA	1前		2		○			1						
高大連携プロジェクトB	1前		2		○			1							
小計（11科目）	—	—	6	16	0	—	—	—	4	3	3	0	0	兼6	—
外国語科目	英語Ⅰ	1前		2		○			1						
	英語Ⅱ	1後		2		○			1						
	英語Ⅲ	2前		2		○								兼1	
	英語Ⅳ	2後		2		○								兼1	
	中国語Ⅰ	1前		2		○								兼1	
	中国語Ⅱ	1後		2		○								兼1	
	中国語Ⅲ	2前		2		○								兼1	
	中国語Ⅳ	2後		2		○								兼1	
	コミュニケーション英語	1通		4		○			1						
	英会話Ⅰ	2前		2		○								兼1	
英会話Ⅱ	2後		2		○								兼1		
海外研修	1前		2			○				1					
小計（12科目）	—	—	0	26	0	—	—	—	1	0	1	0	0	兼4	—
全学共通科目	心理学	1前		2		○								兼1	
	文学	1前		2		○								兼1	
	言語学	1後		2		○								兼1	
	日本国憲法	1前		2		○								兼1	
	法学	1後		2		○								兼1	
	社会学	1前		2		○								兼1	
	経済学	1後		2		○								兼1	
	産業史	1前		2		○								兼1	
	環境学	1後		2		○								兼1	
	数学	1前		2		○								兼1	
	物理学	1後		2		○			1						
	化学	1前		2		○								兼1	
	生命科学	1後		2		○								兼1	
	情報科学	1後		2		○			1						
	社会実践講座A	1前		2				○	1						
	社会実践講座B	1後		2				○	1						
	特別共同講義	1後		2		○			1						
小計（17科目）	—	—	0	34	0	—	—	—	2	0	0	0	0	兼9	—
体育実技科目	スポーツA	1前		1										○	兼1
	スポーツB	1後		1										○	兼1
	小計（2科目）	—	—	0	2	0	—	—	0	0	0	0	0	兼1	—
キャリア形成科目	キャリアデザイン概論A	1後		2		○								兼3	
	キャリアデザイン概論B	2前		2		○								兼3	
	キャリアデザイン講座Ⅰ	2後	2			○								兼3	
	キャリアデザイン講座Ⅱ	3前	2			○								兼3	
	キャリアデザイン講座Ⅲ	3後	2			○								兼3	
	インターンシップA	1後		2				○						兼1	
	インターンシップB	1後		2				○						兼1	
小計（7科目）	—	—	6	8	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼4	—
中計（49科目）	—	—	12	86	0	—	—	—	4	3	3	0	0	兼21	—

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	専門演習A	2前		2			○				1				兼1 兼1
	専門演習B	2後		2			○			1					
	専門演習C	2前		2			○								
	専門演習D	2後		2			○								
	専門ゼミナールⅠ	3前		2			○		3	3	3				
	専門ゼミナールⅡ	3後		2			○		3	3	3				
	卒業研究	4通		4			○		3	3	3				
小計(7科目)			0	16	0			3	3	3	0	0	兼1	—	
教職関連科目	教職入門(教師論)	1前			2	○								兼1	オムニバス オムニバス オムニバス 共同
	教育社会学	1前			2	○								兼1	
	教育心理学	3前			2	○								兼1	
	特別支援教育総論	1後			2	○								兼1	
	教育課程と方法	2前			2	○				1				兼1	
	道徳教育	1後			2	○								兼1	
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	2前			2	○			1	1				兼1	
	教育の方法と技術	2後			2	○				1				兼1	
	生徒指導	3前			2	○			1					兼1	
	教育相談	3前			2	○								兼1	
	進路指導	3後			2	○								兼2	
	事前事後指導	3後・4前			2		○		2		1			兼1	
	教育実習Ⅰ	4前			2			○	2		1			兼1	
	教育実習Ⅱ	4前			4			○	2		1			兼1	
	教職実践演習(中・高)	4後			2		○		2		1			兼1	
小計(15科目)			0	32				2	1	1	0	0	兼8	—	
合計(139科目)			34	205	32			7	3	3	0	0	兼45	—	
学位又は称号		学士(スポーツ科学)			学位又は学科の分野			体育関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
<p><卒業要件></p> <p>以下1、2により124単位以上を修得すること。</p> <p>1. 基礎教育科目 30単位</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎能力形成科目 必修 6単位 ・外国語科目 4単位を選択必修 ・キャリア形成科目 必修 6単位 ・基礎教育科目から14単位を選択 <p>2. 専門教育科目 94単位</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入科目 必修 6単位 ・基幹科目 必修 6単位 ・発展科目 必修 10単位 ・実技科目 2単位を選択必修 ・特殊研究科目 8単位を選択必修 ・専門教育科目から62単位を選択 <p>※「卒業研究」は「専門ゼミナールⅠ」及び「専門ゼミナールⅡ」を履修した者のみ履修が可能</p> <p>※教職関連科目については、教員免許状の取得を希望する者のみ履修が可能であり、卒業要件には算入されない。</p> <p><履修科目の登録の上限></p> <p>1～3年次 44単位(年間)、4年次 52単位(年間)</p> <p>※ただし、以下の科目は年間登録上限に含まれない。</p> <p>高大連携プロジェクトA・B、海外研修、社会実践講座A・B、特別共同講義、インターンシップA・B、卒業研究、教職関連科目</p>							1学年の学期区分		2期						
							1学期の授業期間		14週						
							1時限の授業時間		100分						

授 業 科 目 の 概 要				
(スポーツ科学部 スポーツ科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基礎 教育科目	全学 共通科目	基盤 能力 形成 科目	基礎ゼミナール	学生が有意義な大学生活を送り、卒業後は社会で広く活躍できる人材となるよう、大学生活の過ごし方や大学生として学修する上での基礎を体系的に学ぶ。具体的には、1クラスを10名程度に設定し（入学者を原則専任教員全員担当）で、アドバイザーとなる専任教員の指導の下、読書の方法、レポートの作成方法、発表・プレゼンテーションの方法などを学ぶ。また併せて、学生の修学状況の把握と個別面談結果等のデータを構築していく出発点とする。
			情報処理基礎Ⅰ	本授業では、実際に機器を操作しながら、データから有益情報を読み取るための情報表現の方法とそれを用いた分析方法について学ぶ。データの収集、データの整理、データの加工、グラフ表現の基礎、各種グラフの特徴についてを学んだのち、スポーツに関するデータなどを使って、データ分析やデータ管理を実践的に学んでいく。分析した結果をわかりやすくプレゼンテーションするためのデータ表現方法についても学ぶ。演習は、コンピュータ演習室で実際に機器を操作しながら進めていく。
			情報処理基礎Ⅱ	スポーツに関わるデータなど公表されている様々な身近なデータについて、集計方法の基礎と、データに隠された情報を読取るデータ解析の基本について学ぶ。データを整理する際は、「コード」「日付」「場所」「名前」「数量」「合計」等の多くの情報を、目的に応じて集計を適切に行う必要がある。さまざまなデータの集計、データの解析を通して、世の中に氾濫するデータに対する実践的な対処法についてを学習するとともに、そのデータが示す含意を的確に読み取る視点を学習する。演習は、コンピュータ演習室で実際に機器を操作しながら進めていく。
			コミュニケーションと 音声表現	複雑で多様な現代社会においてはコミュニケーション能力を身に付けることが重要と言われる。コミュニケーションは話し手と聞き手の相互協力によって成り立っている。同年代の学生同士であっても、初対面の相手と良い関係を作りながらディスカッションするのは案外難しい。大勢の人の前で意見を述べるときには、それにふさわしい話し方や態度が要求される。このコースでは、朗読実習、自己紹介、意見発表などの実習を通して、自分に合ったコミュニケーションの取り方を身に付ける。
			コミュニケーションと 文章表現	大学生活はもちろん、就職活動を終えて社会で仕事をするようになってからも、文章を書く機会が多い。文章によって相手に意思を伝えたり意見交換したりするには、独特の書式や表現が必要になる。「書く」というのは時間がかかる作業だが、適切な形を覚えれば誰でもわかりやすい表現ができる。授業では書くときの形と表現を紹介し、それを使って実際に文章を書く練習を行う。これを続けることで「書く」ことに慣れ、社会人としてふさわしい表現を身に付けていく。
			防災・減災と生活 (磐田市)	都市型災害の阪神・淡路大震災、中山間地災害の中越地震、そして海に囲まれた島国であることを痛切に教えた津波災害の東日本大震災。ここ20年あまりに日本が経験した未曾有の災害を教科書としながら、古くは東海沖地震、近年では南海トラフ災害への警鐘の地である静岡県にキャンパスを置く本学が行うべき防災・減災の日常的方策を生活の中から学ぶ。本科目は、磐田キャンパスの所在する磐田市がすべての授業を行うもので(冠講座)、自治体と学生とが災害時に効率的かつ有効に活動ができるよう一体化した授業を行う。
			教養講座A	本講義では人間の多様性、とりわけ障がいのある児・者について理解することを目標とする。具体的な内容としては、障がい児・者が登場する映画、アニメーション、ドキュメンタリー映像等を鑑賞し、その中に登場する障がい児・者及びその周囲の人々の姿から、障がいの特徴、生き方、考え方、支援方法などを学ぶ。また、当事者の立場からも処遇や気持ちについて考え、理解を深める。さらに、障がい児・者と周囲の人々や社会との関係性にも問題意識を向け、障がい児・者が生きる文化や社会の在り方について考える視点を持てるようになることも目標とする。
			教養講座B	人類がおこなったスポーツの、その始まりから今日に至る発展の歴史を、「初めの豊かな社会」「古代」「中世」「近代」「現代」に分けて講義する。「初めの豊かな社会」とは、20世紀後半に経済人類学や生態人類学が提唱した概念で、人類が採集と狩猟・漁労でくらし始めた最初期の獲得経済時代は（ふつう原始時代や未開時代と呼ばれるが）実は余暇に恵まれた豊かな社会であったとするものである。これまでの「食に追われる貧しき原始人」のイメージを払拭するもので、「遊ぶ」を原義に持つスポーツの人類史を考える本科目にとって、始まりの立ち位置を確認する上で重要な意味を持っている。
			教養講座C	本講義は、人間の多様性を鑑み、障がいのある児童生徒の教育について理解を深めることを目標とする。ここでは、特別支援学校を例にとり、それを多角的に考察する。講義の前半では、特別支援学校の歴史、法的位置づけ、学習指導要領、教育課程、教師の専門性、自立活動、基本調査、地域とのかかわり、課題と展望などを整理する。講義の後半では、特別支援学校における教材の意義と種類、絵本、ことばに関する教材、数に関する教材、日常生活に関する教材、ICT教材などを扱う。
高大連携プロジェクトA	本科目は、静岡産業大学が高校生向けに開講する講座であり、本講座を受講・修了し、本学に入学した学生に対してその学習成果を単位として認定するものである。高校生の興味、関心、進路等が多様化していると言われる今日、本学と地域の高校とが連携し、より有為な人材を養成し輩出するために、本学が有する知的資産を活用し、高校生向けの講座を開講する。各講座は本学専任教員が担当し、高校との連携の上で講座ごとのテーマを設定し、授業の達成目標の詳細を定め、それに基づいて授業計画を策定する。			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎能力形成科目	高大連携プロジェクトB	本科目は、「高大連携プロジェクトA」と同様に、静岡産業大学が高校生向けに開講する講座であり、本講座を受講・修了し、本学に入学した学生に対してその学習成果を単位として認定するものである。本科目では、主に静岡県という地域にその対象を絞って、本学専任教員が担当し、高校との連携の上で講座ごとのテーマを設定し、授業の達成目標の詳細を定め、それに基づいて授業計画を策定する。静岡県の文化、歴史、産業等を題材にしたテーマを設定することで、身近な生活から大学における教養教育、専門教育への橋渡しの役割を担う。	
	英語Ⅰ	国際化、情報化、グローバル化等が進行する社会の中でますます高まる英語の必要性に対応する発信型の英語運用能力の養成を目指す。さらに、学習者が各種英語検定試験に対応できるように基礎力を培う。具体的には、基本例文により英文法の基礎事項を確認する。さらに、様々な演習問題や理解度確認演習に取り組むことにより、日常的に使われる自然な実用的英語表現を習得する。以上の言語活動により、特に英語運用能力の総合的な基礎力を培う。	
	英語Ⅱ	国際化、情報化、グローバル化等が進行する社会の中でますます高まる英語の必要性に対応する発信型の英語運用の応用力の養成を目指す。さらに、学習者が各種英語検定試験に対応できるような英語力を培う。具体的には、実用的な文章のテキストを読解することにより、英文読解力の基礎を確認する。さらに、様々な演習問題や理解度確認演習に取り組むことにより、英語表現の構造や論理の理解を深める。以上の言語活動により、特に英語の総合的な活用力を培う。	
	英語Ⅲ	映画の視聴と映画の脚本を基に書かれたテキスト（小説）の読解を通じて、自然でウィットの効いた英語表現とストーリーの背景について学ぶ。課題、小テストによる予習・復習事項の包括的な点検、映画の視聴、ワークシートを使った発問応答及びテキストの内容確認、テキストと映画で使用される英語表現の比較、解説を軸に進んでいく。授業においては、身近な関心テーマについて、英語を使った発表活動に取り組む。	
	英語Ⅳ	「英語Ⅲ」に引き続き、映画の視聴と映画の脚本を基に書かれたテキスト（小説）の読解を通じて、自然でウィットの効いた英語表現とストーリーの背景について、より高度に学ぶ。テキストや映画の中で使用される含蓄のある英語的な言い回しや発想に対応できる能力を養い、ストーリーが示す文化的・社会的背景への関心や理解も深めることで、実用的な英語運用能力の向上を目指す。	
	中国語Ⅰ	本授業は、入門者に設けられる中国語コースである。中国語は漢字で表記するので、一見勉強しやすいつと思われがちである。しかし、中国語の発音は日本語より豊富なため、日本人にとっては、正確な発音ができるようになるまでには努力を要する。従って授業では、発音の反復練習とヒヤリングにより、まず中国式のローマ字を見て正確な発音ができることと、中国語の発音を聞いて、それをローマ字綴りで、聞き取れることを目指す。中国語の発音をしっかりとできれば、中国語は日本人にとっては、わかりやすい外国語である。	
	中国語Ⅱ	基本的には「中国語Ⅰ」を修了した者を対象とする。従って、「中国語Ⅰ」で学習した土台の上に立って、さらに、正確な発音を求めると同時に中国語の語彙と表現を充実させる。講義は日常会話が聴ける、話せる、読めるを目標とする。そのために、教科書を中心に中国語の新聞・ビデオ・音楽などを利用し、楽しく中国語を学ぶ。最終的に、この半年で、一般的な日常会話と基礎的読解力の習得を目指す。さらに、中国語検定四級の内容も取り入れる。	
	中国語Ⅲ	基本的には「中国語Ⅰ・Ⅱ」を修了した者を対象とする。従って、「中国語Ⅰ・Ⅱ」で学習した土台の上に立って、さらに、正確な発音を求めると同時に中国語の語彙と表現を充実させる。講義は日常会話が聴ける、話せる、読めることを目標とする。そのために、教科書を中心に中国語の新聞・ビデオ・音楽などを利用し、楽しく中国語を学ぶ。最終的に、この半年で、一般的な日常会話と基礎的読解力の習得を目指す。	
	中国語Ⅳ	基本的には「中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を修了したものを対象とする。従って、「中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で学習した土台の上に立って、さらに、正確な発音を求めると同時に中国語の語彙と表現を充実させる。講義はより多くの日常会話が聴ける、話せる、読めることを目標とする。そのため、中国語の新聞・ビデオ・音楽などを利用し、楽しく中国語を学ぶ。最終的に、ある程度日常会話ができ、聴きとれるようになることを目指す。	
	コミュニケーション英語	高等学校における新学習指導要領で加わったコミュニケーション英語を基盤にして、自分の意志・考えを相手にわかりやすく伝えて相手の意志を理解する、というコミュニケーションの基本を、話すことと聞くことを中心にトレーニングし、その前提となる読むことと書くことも有機的に組み込んで実践する。英会話という従来型の殻を破って、思うこと、考えることを相手に伝えるために、限られた単語を利用していくことで日本語でのコミュニケーションスキルの向上にもつながる。	
英会話Ⅰ	基本的レベルからの英会話授業である。ペアワークを中心にして、挨拶、職業、スポーツ、食べ物などの様々なトピックについて質問したり応答したり意見交換をしながら主にスピーキングの学習をする。また、映像を使用して実際のネイティブスピーカーの音声を聞いたりしながら、リスニング能力も高め、資格検定への挑戦意欲を高める。		
基礎教育科目	外国語科目	全学共通科目	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基礎 教育 科目	外国語科目	英会話Ⅱ	本授業は中レベル英会話クラスである。学生は既知っている英語とこの授業で学んだ英語を使ってペアで様々な話題について議論する。映像やリスニング活動も使い、実践的な英語の培養を行う。また、英語の種々の検定試験への準備も行っていく。	
		海外研修	日本におけるスポーツ文化は、他の国々と比べて「特殊」とであると形容されることが多い。そのひとつの要因は、楽しみ、競争、気分転換、健康づくりなど、スポーツの持つ多様な構成要素の中で、教育に関わる部分が特に重視されてきたことがあげられる。本授業では、他の国々でどのようにスポーツが理解され、そして行われているかを体感することによって、今後、多様化していくと考えられる、スポーツに対するニーズに応えられる視野の形成を目的とする。	
	全学 共通 科目	教養 科目	心理学	心理学とは、「こころ」の仕組みや働きを科学的に解明しようとする学問である。人間の関わる場所すべてに心理学が関わるとさえ言われるほどに、心理学の学問領域は広い。また同時に、私たちの日常生活と密接な関わりを持っている。心理学の主な領域をテーマとして取り上げ、今日までに見いだされている知見を交えて解説する。また、スポーツと心理学の関わりについても触れる。心理学を教養として学ぶことを通じて、私たちが普段何気なく行っている活動を見つめ直し、新たな視点から捉える機会としたい。
			文学	文献文化学としての文学は、東洋文化学系と西洋文化学系に分類される。本講義では、東洋文化学系では、日本、中国、インド、それぞれを中心とした三つの文化圏を対象とし、それぞれの長い歴史の積み重ねによって培われてきた文化の中で、人々がどのように考え、どのようにして文化を形成してきたかを、文献を中心として講義する。そして、西洋文化学系では、明治以来の日本人が飽くことなく西欧文学を摂取することで日本語を変革し、世界の見方を広げて来たことを踏まえて、言語と文学を通じて世界を理解することとする。
			言語学	コミュニケーションは、我々が他者と交流し、日常的に社会的生活を営むうえで欠かすことができない、中心的な役割を果たしている。そして、人間が使用するコミュニケーションの主たる道具は言うまでもなく、言語である。授業では、言語の本質を追究する学問である、言語学の発展の歴史を概観し、言語研究の主要な分野・領域について認識を深めると共に、言語学習者の分析から解明されつつある様々な特徴、言語習得・学習のプロセス、言語能力の構造と評価のあり方について、探求する。
			日本国憲法	日本国憲法は、施行からおよそ70年余が経過し、過去様々な議論に晒されながらも戦後日本の進路に対して、わが国の最高法規として基本的な方針を示してきた。今般、改正の是非が囁かれるなか、その存在意義が問われている。本講義では、日本国憲法の二大テーマである基本的人権及び統治機構を中心に論じつつ、現在議論が高まっている憲法改正、また、天皇の生前退位等にも言及する。可能な限り受講生の皆さんにも発言してもらおうよう双方向の講義を心掛ける。
			法学	法学は法律学ともいう。広義には、法及び法現象を専門的に研究対象とする学問の総称である。大別して(1)法及び法現象の経験科学的、理論的な解明を直接の目的とする理論法学(基礎法学ともいう)、(2)立法、行政、裁判に役立つ法原理、法的技術を中心に体系化されている実用法学(応用法学ともいう)に分けられる。(1)は法哲学、法社会学、法史学、比較法学から成り、(2)は法学の中心的な位置を占めてきた法解釈学、法政策学から成る。本授業では、こうした体系を概略的に学ぶ。
			社会学	社会学がどのような考え方をする学問であるのかを明らかにしたうえで、社会学的視点からものや現象を見るということはどういうことなのかを、家族や地域社会等の日常生活に関わる領域を取り上げて、分析・考察を試みる。また、この分析・考察にあたり必要となる諸情報を収集する社会調査の方法についても紹介し、今後の人間社会の在り方を展望する。その際、とりわけ日本・日本人に焦点を当て、これからの国際社会における日本社会の方向性を検討する。
			経済学	私たちは容易にコンビニでパンを買うことができる。それは極めて当然のことに思われるが、パンの購入が可能であるのは(1)家計が労働を通じて所得を得ると共に、(2)企業が小麦を輸入、工場ではパンに加工し、(3)政府が道路などを整備、日本銀行が貨幣を供給しているからである。また価格が家計と企業をつなげ、パンに大幅な売れ残り、品不足が生じないよう調整している。私たちは何気なく日常を過ごしているが、その背後にはこのように家計・企業・政府・海外が行う「モノを買う」「モノを作る」「働く」といった経済活動、またそれらを体系的に組み合わせた「経済システム」が存在するのである。この授業はこうした基礎知識の修得を目標とする。
			産業史	産業の発展には多くの条件が関わる。技術を学ぶ・あるいは創り出す能力、それを準備する企業家の役割や政府の役割、また歴史的な偶然や他国の思惑などの外的な影響、などである。本講義ではこれらの諸条件に注目しながら、主として明治以降の日本における経済・産業・企業の発展を紹介し、製紙・鉄鋼・自動車・食品・機械・流通などの産業において、企業分析をしながら、日本がどのように世界有数の経済力・工業力を持つようになったかを考える。
環境学	一般に環境学とは、人と地球環境の密接な結び付きを理解し、自然科学と人文・社会科学の知識を合わせ、人が自然と共存し、持続可能な発展をめざす学問であると言われる。その領域は多岐にわたっており、人と自然を一連のシステムと捉えて環境問題の解決策を研究する分野、主に都市と自然と人の調和を研究する分野、複雑化する地球環境に対応するために地球環境・生態などからなる分野がある。本講義では、こうした各分野を体系的に概説する。			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基礎教育科目	全学共通科目	数学	多岐にわたる数学の分野の中から選ばれたトピックスを通して数学の世界を理解する。たとえば、組み合わせの数学、微積分の発生の歴史、幾何学の代数的な方法が考えられる。ここでは、こういうことを題材に、高校までの数学とは少し違った内容を取り扱いながら、論理・推論・証明を学習する。論理的思考力をはぐくみながら、理解・納得・知的感動を共有することをめざすとともに、数学のもつ社会的意義や有用性の理解をめざす。	
		物理学	古典物理学・現代物理学を理論的構成に着眼しつつ紹介する。ニュートンにはじまり19世紀にはほぼ完成したと思われた物理学は古典物理学とよばれる。古典物理学で解決できなかった問題が、20世紀初頭に量子論と相対論の誕生を促し、さらにその総合とも言える場の理論が、観測技術、実験技術の向上と共に飛躍的な発展を遂げた。一般には20世紀以降の物理学を現代物理学という。また、場の理論のもつ「問題」の解決が、ストリング理論等の新しい数理論理学の分野を開き、数学への影響をもたらした。こうした物理学の展開とエッセンスを物理学の歴史を交えて紹介する。理論的構成に主眼を置くが、もちろん、現行の実験物理学の現状とその成果も紹介する。	
		化学	化学とは、物質の構成・性質・変換を分子・原子レベルで扱う学問である。この科学の知識に基づき様々な化学物質が合成され、現代生活において利用されている。本講義では、まず物質の基本単位が元素及び原子であることを説明し、原子から分子が構成され、様々な化学物質が存在することを紹介する。つぎに、無機化合物、有機化合物及び人工合成物質などの化学物質からいくつか選びその性質を紹介し、身近な生活の中で利用されている化学物質があることを説明する。また、物質の三状態(気体、液体、固体)についても紹介し、物質によってその状態が変化することを説明する。さらに、物質が作られる化学反応について、その原理を含めて説明する。最後に、化学物質の分析方法を紹介し、水質汚濁などの化学物質の汚染の検出例を紹介する。	
		生命科学	生物の基本単位は細胞であることが知られている。そこで、この講義では分子生物学の知識に基づいて、細胞レベルでの生命現象を説明し、「生きている」とは何かという生命現象に関する理解の一助とする。また、細胞の集合体としての個体レベルの分野についても説明する。さらに、生命科学分野における技術をよりよく理解できる基礎的知識を提供し、新聞等で報道される生命科学の記事の理解の助けとしたい。概論として、細胞を単位としてみた生物の多様性について説明する。つぎに、細胞の構造と機能について述べる。さらに、自己複製を含めた遺伝情報の仕組みについて説明する。また、細胞内で行なわれている代謝について、その意義と代表例について説明する。後半では、生物の個体レベルの分野として、免疫、個体発生及び進化について説明する。最後に、最近のバイオ技術について説明する。	
		情報科学	人間が行う計算や言語使用、記憶、認識、理解、推論、学習などをいかにコンピュータを使って行うかを研究する分野が情報科学である。近年の人工知能(AI)はその典型である。本講義では、コンピューターサイエンスとも呼ばれる情報科学の概要を学ぶ。そのために、C++、C、Javaなどによるプログラミングにも簡単に触れ、またネットワーク関連の実習も行う。ハードウェアはメインピックではないが、現代の情報科学を理解する上で、その知識は必須であり、当然その学習もする。その上で、現代社会とこれからの社会のあり方等を考えていく。	
		社会実践講座A	スポーツ科学は社会の現場を学びのフィールドとする実学である。本講座の目的は、学生が社会における様々なプログラムへの参加を通して、スポーツ科学の学修のきっかけを得ること、また学内の講義・演習科目などとの相互関係を通して、それらの学修を深めることである。対象プログラムは、大学・学部が認定する企業見学、企業ガイダンス、学外講師講演・公開講座、スポーツ指導体験、社会貢献活動などである。学生は、大学・学部を通じてそれらへの参加を申し込み、対象プログラムの担当教員の指導を受けながら、事前の準備、当日の体験、事後の振り返りなどを行う。	
		社会実践講座B	スポーツ科学は社会の現場を学びのフィールドとする実学である。本講座の目的は、「社会実践講座A」に引き続き、学生が社会における様々なプログラムへの参加を通して、スポーツ科学の学修のきっかけを得ること、また学内の講義・演習科目などとの相互関係を通して、それらの学修を深めることである。対象プログラムは、大学・学部が認定する企業見学、企業ガイダンス、学外講師講演・公開講座、スポーツ指導体験、社会貢献活動などである。学生は、大学・学部を通じてそれらへの参加を申し込み、対象プログラムの担当教員の指導を受けながら、事前の準備、当日の体験、事後の振り返りなどを行う。	
	特別共同講義	公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムは、静岡県西部地域の7大学(静岡大学・工学部、情報学部、静岡理工科大学、静岡産業大学、聖隷クリストファー大学、浜松学院大学・短期大学部、常葉大学、静岡文化芸術大学)及び3市(浜松市、磐田市、袋井市)から成る組織である。同組織は、産官学の交流促進や授業科目の拡充などを目的し、共同授業を開講する。本授業科目は、学生がそれを受講し、教養や視野を広げることを目的とする。毎年、ふじのくに地域・大学コンソーシアムが各大学・市と協議のうえ、共同授業のテーマを設定し、授業計画や提出課題、成績の評価方法・基準などを決定、それらを募集要項に公表する。		
体育実技科目	スポーツA	ネット型球技の代表として、バレーボールを中心に授業を進めていく。バレーボールに関する、サーブ、レセプション、トス、スパイク、ブロック、パスといった基本的技術を身に付けると共に、それらの理論や指導法についても学んでいく。また、バレーボール特有のローテーションやポジションに関するルールを理解出来るようにする。そして、実際の試合を通して個々の技術のスキルアップを目指すと共に、仲間と協力してボールを繋いでいく技術や、バレーボール本来の楽しさをチームメイトと共有できることを目指す。さらに、技能向上だけでなく、9人制バレーやソフトバレーなど、生涯スポーツとしてのバレーボールを楽しむ工夫を探索し、性別や技術レベルが異なっても、一緒にゲームを楽しむ方法なども企画・実践していく。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目 全学共通科目 キャリア形成科目	体育実技科目 スポーツB	ニュースポーツの多くは技術的には手軽に参加できるため、子供から大人まで幅広い年齢層において親しまれている。本授業では、ホッケー型の競技、フライングディスクを用いた競技、タグラグビーやゴルフといった、普段はあまり触れることのないニュースポーツに取り組むことで、ニュースポーツの持つ魅力の探求だけでなく、どのような経緯で開発・改善されてきたのかについても体験的に学修する。また、自らプレーを楽しむだけでなく参加者が楽しさを感じるためには、どのような工夫が必要となるのかについても言及していく。	
	キャリアデザイン概論A	キャリア教育とは何か、何故1年生から取り組む必要があるのかといった本質理解からスタートし、1年次においては最終目標として学生生活における目標の設定をゴールとする。その過程において自分自身を知ること、現在の社会・企業・雇用情勢を把握すること、何故人は働くのかといった労働観・仕事観の醸成に取り組む。具体的には、これまでの自分自身を振り返る（自分史の作成）、アセスメントの実施、グループでの仕事観のディスカッション、将来の自分をイメージする為に20代・30代・40代といった幅広い層の社会人を招聘してのパネルディスカッションなど、座学に加え、双方向で授業に参加できるアクティブラーニングを積極的に取り入れた全員参加型の授業を実施する。また、社会に出る上での基本であるパブリックマナー（挨拶、時間管理、報告・連絡・相談など）の重要性の理解・実践も同時に行う。	
	キャリアデザイン概論B	世の中の様々な業界や職業の種類・特徴、企業規模によるメリット・デメリットなど、企業研究の基本を学ぶ。また、地場産業の成り立ちや課題、今後の展望など、地域の企業を知る・学ぶ為にグループでフィールドワークを実施し、自らが学び研究する機会を設定することで身近な会社の存在と興味喚起を行う。また、企業の人事担当者・若手・中堅社員・経営者といった立場や経験の違いのある社会人を招聘し、さまざまな仕事観・人生観に触れる機会を設ける。これらの授業では、学生が積極的に質問や議論を行うことで自主性・主体性を育むことも目的とする。また、自らが学んだことをパワーポイント等を用いて大勢の前で発表するプレゼンテーションスキルも養う。	
	キャリアデザイン講座Ⅰ	進路選択につながるキャリア形成プランニングスキルの定着を目指す科目である。例えば、教員の支援のもと、学生同士が自分の志望する業種・職種・地域について意見交換をすることで、働くことへの意欲を刺激し、キャリア開発・就職への意識改革・向上を目指す。その他、多くの企業が社員研修や採用面接に取り入れているEQ（情動指数、心の知能指数）の知識を学び、今後の就職面接対策や将来のビジネスパーソンとしてのヒューマンスキルを高めていく。	
	キャリアデザイン講座Ⅱ	「キャリアデザイン講座Ⅰ」での学びを活かし、具体的に自分の将来像や業界、企業選定がイメージできるようになる。選定理由（志望動機）を分かりやすく人に伝える文章力、口頭伝達力を養う。エントリーシートや履歴書の書き方の基本、筆記試験の概要やSPI試験対策、基礎的な個人並びに集団での面接手法の理解と演習を行う。社会人としてふさわしい、ビジネスマナーを持って面接対応ができる・自分を表現する力、プレゼンテーション能力を活かすことができる・就活スタートまでに履歴書を作成し、面接対応もできる・より実践的な就活手法を学び行動ができることを目標とする。最新の就活における情報提供も随時行う。	
	キャリアデザイン講座Ⅲ	進路選択につながるキャリア形成プランニングをキャリアデザインにおいて体系的に行ってきた成果をまとめ、職業選択の実際に入って行くと同時に、自己の人生を積極的に切り開いていくための意欲を養う。希望実現のための最終ステップの科目である。4年生内生定者からの就活における成功・失敗事例などの具体例、社会人OB・OGからの企業選択におけるアドバイス、人事担当者から企業が求める人材の詳細や面接で企業は学生のどこを見るのかなど、生の声を聞ける・確認できるパネルディスカッションを実施する。社会人としての自立と自律を目指すための第一歩が就職活動であり、就職活動はPDCAサイクルである。まさしく就職活動＝仕事の体験であることを意識して、今までキャリアデザイン系科目で学んだ知識を実践で活かせる学生になる。それを支援する最終授業である。	
	インターンシップA	本科目は実際に企業等で一般社員・従業員などと同じ職場環境で様々な業務を体験し、産業社会の有様を知り、自らの職業観を育成し、社会人基礎力を高めるためのものである。インターンシップ先で業務を行う中で、経営の在り方、人事や社員教育の方針を学び、将来の職業選択に活かすための授業である。このため、無給で働き、夏期休暇の期間中などの一定の期間において各自職場研修を行い、自らを高める。インターンシップ先は、市役所などの公共機関、金融機関、販売業、IT企業、スポーツ団体、スポーツ関連企業、サービス業、製造業など多岐にわたる。履修者の安全を考慮して、原則、大学がインターンシップ先を選定し紹介するが、自主性を伸ばす観点から学生自身が開拓することも重要である。	
	インターンシップB	「インターンシップA」で事前指導、準備を受け、自らが希望した企業へ訪問し、インターンシップ活動を行った学生のための授業である。原則5日以上の活動とし、日々の活動日誌をつけ、インターンシップ終了後報告書をまとめる。また自らの取組成果の発表と後輩への助言を目的とし、全員がパワーポイントを使用した報告発表会を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 スポーツ科学科専門科目 導入科目	スポーツ科学入門	<p>本講義「スポーツ科学入門」ではスポーツ科学およびその関連領域について学習する。人間のからだと動きを、運動生理学をはじめ、運動学、バイオメカニクス、解剖学、リハビリテーションなど幅広い分野から人間を多角的に、また人間を幼児から中高齢者、スポーツ愛好家からアスリートまで幅広く捉えて学習する。本講義では、これまでの教科書に記載されている科学的情報に加えて最新のトピックスを踏まえながら学んでいく。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(1 小澤 治夫/7回) スポーツにおける人間の「からだ」と仕組みと働き、運動生理学やスポーツ医学とその活用の実際について講義する。</p> <p>(8 館 俊樹/7回) スポーツにおける人間の動きをバイオメカニクスとその活用から講義する。</p>	オムニバス方式
	スポーツと教育	<p>スポーツの楽しみ方には「する：do、play、compete」「みる：see、watch、analyze」「ささえる：support、produce」があり、本講義ではこうした視点からスポーツの多様性について学習する。また、スポーツの歴史や運動特性、身体への影響や効果は各種スポーツ種目によっても異なる。スポーツが、学校における体育教育だけでなく、社会体育においても果たすことの意義について学習することによって、スポーツの概念の形成をはかっていく。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(1 小澤 治夫/4回) スポーツ科学の学校教育における活かし方について講義する。</p> <p>(2 寒川 恒夫/3回) 体育とスポーツの領域と歴史、オリンピックと教育などについて講義する。</p> <p>(5 高橋 和子/4回) からだの動きとこころの関係及びダンス・舞踊と教育について講義する。</p> <p>(40 小林 寛道/3回) スポーツと年齢・自然科学について講義する。</p>	オムニバス方式
	ライフステージ運動論	<p>健康でQOL(生活の質)が高い人生を送るためには、幼児期から高齢者に至る各ライフステージにおいて、いわゆる発育発達及び老化に伴った身体面や心理面の特徴(形態・機能・体力・運動能力)段階を理解し、運動を目標に合わせて適宜実践していくことが重要である。本講義では、各ライフステージに即した安全で効果的な運動の方法や運動指導の在り方や考え方について、国や地方自治体の取り組みについて学習し、具体的な方法や施策についてアクティブラーニングも活用して学習する。</p>	
	からだ気づき	<p>生きている私たち人間は通常、心臓の存在を意識することがない。呼吸も視覚も、また歩行でさえも意識していない。こうしたこと存在を確かめることによって身体感覚を獲得し「からだ観」を形成していく。本講義では、からだはもともと「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」という5つの働きを持っていること、それらを各種の静的姿勢、動的姿勢、運動様式を通して学習し、それらと人間の身体の関係から「からだ」に気づく体験と学習を行うと同時に、その指導法について学ぶ。特に、人間は様々な伝達手段によって人の考えや感情を表現する。そのもっとも根源的な表現である「からだの動き」に着目して考察する。</p>	
	トレーニング科学	<p>競技スポーツにおける「科学的なトレーニング」とは、最新鋭のテクノロジーを活用したトレーニングと同義ではない。数多くのスポーツ研究から得られたエビデンスに基づき、効率的にパフォーマンスの向上が見られるトレーニングこそ科学的である。本授業では、様々なスポーツトレーニングの効果や方法に関する基礎的知識や手法について紹介しながら、且つ現代的なテクノロジーによって測定されたデータを活用したトレーニング方法についても実践的かつ科学的な内容について理解を深めることを目標とする。</p>	
	体力学概論	<p>体力とは何かを理解し、体力に影響を及ぼす要因を把握することは、運動に関わるあらゆる職業で重要だと考えられる。本講義では、体力の構成要素、並びに発育発達や加齢、スポーツ活動によって体力がどのように変化するかを理解することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(9 江間 諒一/7回) 体力を評価する方法について学び、それを教育や研究、社会活動の現場で活用できる能力を習得する。</p> <p>(12 宮崎 彰吾/7回) 健康と体力の関係について、自らの考えを体系的に述べられるようになることを目指すため、前7回の授業で得られた知識をさらに深耕し体系化する授業を行う。</p>	オムニバス方式
	ストレスと健康の科学	<p>経済状況・労働環境の変化や少子高齢化など、社会が急速に変化してゆくなかで、人々は絶えず様々なストレスにさらされており、メンタルヘルスクエアに対する社会的関心が日々高まっている。本講義では、こころの健康の維持についてストレス科学の側面から理解することを目的としている。具体的にはストレスのメカニズム、ストレスへの気づき、そしてストレスへの対処法を解説し、メンタルヘルスのセルフケアができることを目指す。また、各自の身近な人として、子どもから高齢者のストレスマネジメントについても取りあげることによって、職場だけでなく、学校や地域におけるメンタルヘルスクエアの実践へとつなげていきたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
専門教育科目	導入科目	スポーツ文化論	本講義では、スポーツや体育の世界で問題にされる社会現象を取り上げ、その文化的背景について講義する。文化(culture)という言葉は、耕す・植物を栽培するを原義とし、後に人を世話する・育てるの意味を得て、この理解で、教育・啓蒙・芸術学術奨励・洗練・教養などをあらわすようになった。文化勲章や文化人、文化住宅といった用法は、その例である。しかし本講義では、文化をこうした価値の優劣判別とは無縁の、人間の生活様式の全体と人類学的に理解する。社会現象の複雑な背景理解に適っているからである。トピックとして、ドーピング、ジェンダー、フェアプレー、健康、運動、オリンピック、アマチュアリズム、遊び、労働、身体が目される。		
		教育原理	「教育(学習)」という営みを歴史的、文化的な視点から捉え、学校、家庭や地域社会における教育の機能及び相互の関連を学び、教育の本質と目標及び教育の現代的な意義を理解する。教育の歴史に関しては、近代日本の学校の制度や教育課程・内容の歴史を中心に、地域・社会・家庭・学校における教育の変遷について基礎的な知識を習得する。そこから教育に関する現代的な課題を理解する。さらに、教育の歴史のなかで現れてきた様々な教育の理念や教育思想について概観すると共にそれらを社会状況や制度、実践と関連して理解し、教育という営みを構造的に把握する。		
		健康情報学	健康の維持、増進、回復にとって必要とされる情報について、いかに正しい健康情報を得られるかということを中心とする授業である。近年アメリカで主張されるようになったヘルスリテラシーの考え方を中心に、健康に関わる情報の考え方とその方法について、具体的な健康課題を取り上げながら考えていく。授業は演習形式に進め、学生が自ら主体的に調査し、発表していく能力を身に付けられるように展開していく。健康情報に対するクリティカルシンキングとディジションメイキングを重要としたい。		
	スポーツ科学専門科目	基幹科目	運動生理学	運動生理学は、身体運動によって身体の諸機能がどのような応答や適応を示すのか、そしてそれら応答や適応が生じるメカニズムは何かを明らかにする学問である。運動生理学に関する基本的な知識は、保健体育教員や健康運動実践者等の健康づくりに関わる仕事において必須となるものである。本講義では、身体を構成する各器官に関する基礎的な知識を習得し、それらの器官が身体運動によってどのような応答や適応を示すのかを学ぶ。さらには、運動生理学的視点から、健康づくりに関する運動の意義について考える。	
			スポーツ文化史	日本のスポーツ文化は明治に始まると考える人が多いが、日本人は「スポーツ」という言葉こそ使わないものの、様々な種目の競技と遊びを古くからおこなっていた。それらは、日本人の発案になるものもあつたであろうが、多くは様々な時期に大陸や島嶼部から伝来したもので、日本人は長い時の経過の中でこれらに特異な文化的工夫を施して日本化してしまう。今日、我々が日本独自と認識するものも、実はこうした新解釈の日本の変容であるものが多い。本講義では、史料と遺物と民俗誌・民族誌を総合して、主に日本人のスポーツ文化の歴史について考える。	
			スポーツバイオメカニクス	本授業では、力学・生理学・解剖学を活用して、身体運動を整理して考えるために、バイオメカニクス的手法とその解釈について学ぶ。スポーツや日常の動作を対象に、現象として起こっている身体運動の「フォーム」や、その原因となる「力」に対してアプローチしていく。その際に「巧みさ」「正確さ」「強さ」などの感覚的な観点を重要視する。一つの身体運動を取り上げて、バイオメカニクスのアプローチ及び解釈を行い、その運動を論理的に説明できるようになることを目指す。	
		子どもスポーツ論	こどもの健全な心身の発育発達のためにふさわしいスポーツとはどのようなものかを学ぶ。スポーツは単なる運動や体育とは異なる。しかしそれが一般的に理解されているとは言いがたく、スポーツの名のもとに、子どもたちの健全な発育発達を阻害するような活動がなされていることも少なくない。幼少年期のこどもにとって良いスポーツのあり方とは何か、なぜスポーツが必要なのかを、こどもを取り巻く環境や、現代のこどもに生じている心や体の問題などを題材にして学ぶ。		
		体育原理	本授業では、体育・スポーツ科学系学部の専門である体育を正しく理解するために、体育それ自体を改めて自覚的に掘り下げ、その本質や基盤、そして教育としての可能性等、あるいはそれに関連する諸知識について理解を深めると共に、体育・スポーツ科学の専門家あるいは体育・スポーツ関連職志望学生としての基本的な考え方を養成する。		
		運動方法学	身体運動の発現のしくみと、発現された身体運動がどのような特性を持って外に現れるのかを、身体の機能的生理特性と物理法則を通して理解するものである。また、学校における保健体育やスポーツの指導においては、「身体運動の指導を通じた教育」も重要であり、運動指導における教育的位置づけを考える必要もある。本講義では、スポーツや生活動作において、身体の各部位がどのように機能し、力を発揮しているかを学習していく。		
		スポーツ心理学	立つ、座る、歩くといった日常的な身体運動は当然のことながら、運動やスポーツはさまざまな文脈の中で取り組まれており、その活動目的は、教育、競技、レクリエーション、健康・医療と多岐にわたる。多種多様な活動の中で起こる現象に対して、基礎と応用からの科学的説明を目指すのがスポーツ心理学である。スポーツ心理学は、体育・スポーツの実践や指導に寄与するだけでなく、身体運動を手がかりに新たな人間理解を促す可能性を秘めている。本講義の達成目標は、スポーツ心理学領域における応用分野を中心に基礎的な知識を身に付け、体育・スポーツ現場での指導に生かす能力を身に付けることである。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目 スポーツ科学科専門科目	基幹科目	スポーツ医学 現在のスポーツ医学研究は予防に重点をおいている。さまざまなスポーツ外傷の受傷シーンを映像で捉えることで、発生メカニズムを分析している。そこから、予防策を見出す研究が多数行われている。その中には動作を変える、身体を変える、ルールを変えるなど、さまざまな取り組みが含まれる。例えば膝の前十字靭帯損傷をおこしやすい動きを変えるトレーニングは損傷の多い女性スポーツでは現場に取り入れられており、体幹を支える筋を強化するトレーニングは非常に多くの競技で実践されている。こうした取り組みの結果として実際に怪我が減ったかどうかのモニタリングも重要であり、その証拠をもってエビデンスが得られる。本講義では、こうした基本的な事項を学んでいく。		
		公衆衛生学 公衆衛生学とはヒト集団の健康を扱う学問であり、ヒト集団の疾病予防と健康増進を目的としている。したがって、この分野には疾病の原因を探ることだけでなく、予防を中心とした実践的な活動も含まれている。また、対象とする集団によって、幾つかの分野(母子保健、学校保健、産業保健、老人保健)が存在する。本講義では、公衆衛生学の様々な分野の中から、人口・保健統計、疫学、環境保健、地域保健、産業保健などを紹介していく。		
	スポーツ科学科専門科目	発展科目	女性とスポーツ 女性とスポーツを、「心身」「歴史」「ジェンダー」「健康」「ファッション」「種目特性」等の視点から考察する。例えば「からだ」に着目すると、女性のからだは男性とは構造も機能も大きく異なり、体力や運動能力は、一般人の場合、女性は男性の約6割、一流アスリートでは約8割、世界トップクラスでは約9割である。また、女性は仲間と一緒に運動することに興味を示すのに対し、男性は運動技能の向上に興味を示す。こうした特性もスポーツ的能力の向上や開発には欠かせない視点である。本講義ではこのような女性の特性とスポーツの関係を様々な視点から学び、指導に活かすことのできる資質を養うことを目的とする。	
			体育測定法 身体運動は、その目的に関わらず、目に見える数値で表現することが難しい。そこで様々な測定法を用いて、身体運動を数値化する試みが行われてきた。本授業科目では、潜在的な能力と顕在的なパフォーマンスの関係や、次元測定の原則、測定モデルの種類、信頼性と妥当性などを学習したうえで、実際のスポーツや各種の運動場面における測定を行う。さらに、そのデータを用いて、基本統計、相関分析、回帰分析、因子分析、構造方程式モデリングなどの統計手法を実践的に学ぶ。	
		機能解剖学 身体運動に関係する骨、筋肉、靭帯、腱、軟部組織、循環器、消化器の名称や位置、それらの特性や機能を中心に学習する。また、競技、日常生活のなかでそれぞれがどのように働くかを、それらの特性や実例を中心に紹介していく。特に肩関節、股関節、膝関節についてはスポーツ動作中の機能や特徴を詳細に学習する。身体組織の名称や動きを理解することは、スポーツ医科学の世界でコミュニケーションをとるのに必須である。また、筋、骨などがどのように成長するか、どのように力を発揮するかについての基礎的な知識を学習する。		
		スポーツ栄養学 運動(スポーツ)、栄養、休養は健康増進の三つの柱である。運動(スポーツ)を指導する上でも、一般人の栄養についての知識が必要である。本講義では、栄養素の基本的知識(役割、消化・吸収)、生活習慣病予防と食事との関係や、体重調節について概説する。また、アスリートにおいてコンディショニングを最良の状態にし、パフォーマンスを向上させるためにも、栄養及び食事は重要である。そこで、アスリートの栄養・食事管理に必要な基礎的な知識を習得してもらうために、「スポーツ栄養マネジメント」を軸にスポーツの種目別の栄養・食事内容の特徴、身体組成の測定方法、さらには、トレーニング期、試合前後それぞれのステージにおける食事の特徴なども取り上げる。		
		ヘルスプロモーション概論 ヘルスプロモーションとは何か、その意義とねらいについて考えていく授業である。特に青年期を視座に入れながら、生涯にわたる健康の維持増進にとって必要と思われる健康の基礎理論を取り上げていく。歴史的に見ても、これまでの健康が個人的側面によって捉えられてきたという観点をさらに発展させ、自然的、社会的環境要因に着目して健康を捉えようとしたヘルスプロモーションの概念を、なるべく身近な健康問題を取り上げながら考察していく。		
		生理心理学 生理心理学とは、精神機能や行動の生物学的な基礎を研究する学問領域である。本講義では、古典的な生理心理学や精神生理学に加えて、近年急速に発展してきた認知神経科学や神経心理学の方法と知見も加えることによって、行動の神経レベルにおける理解を目指す。具体的には、脳・神経系の成り立ちと神経系における神経伝達の仕組みについて学修し、これを基に学習・記憶・情動・動機付けなど高次の脳機能について神経レベルにおける解説を行う。精神機能と行動の関係について神経科学的な理解を目指す本講義は、ヒトの精神活動と身体活動の連携を追求する学問であると言い換えることができる。従って、将来アスリートを目指す学生からスポーツ科学研究を志す学生にいたる、幅広い学生に必要な内容を取り上げて講義を進める。		
	学校保健 中高教職科目としての学校保健学の基礎知識を学ぶ授業である。学校における児童、生徒、学生、教職員の健康と安全を守る主たる担い手として身に付けるべき知識として、学校保健とは何か、学校保健の目標とねらい、歴史について学んだ後、学校保健諸活動について具体的事例を取り上げながら授業を進める。また、授業では学校安全、精神保健、小児保健、救急処置についても取り扱う中で、特に子どもの現状と課題について考える授業を展開していく。 (オムニバス方式/全14回) (7 和田 雅史/10回) 学校安全、精神保健について担当する。 (13 中井 真吾/2回) 救急処置について担当する。 (46 市江 和子/2回) 小児保健について担当する。	オムニバス方式		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
スポーツ 科学科 専門科目	武道論	日本の武道、とりわけその身体観を文化論の範疇で講義する。武術は身体運動としての現象であるため、体育・スポーツ領域の運動学で扱われもする。だが、日本の武術に特有な思想や言語、型の伝承と創造に注目すれば、身体は文化論や言語論、実践論の領域でとらえられる。柔道を中心に、現象学的手法による武道的な身体論の視座から講義し、受講生の文化理解を深める。	
	レクリエーション論	レクリエーションは、主に自由な時間に行われる自発的な創造活動であり、楽しさや休息といった意味を持つ。人と人のコミュニケーションを促すという社会的な役割も担っているため、私たちの日常生活を豊かにしてくれる可能性を秘めている。スポーツ、レジャー、音楽、旅行、介護等様々なジャンルと親和性が高い。本講義においては、レクリエーションの意義・歴史・仕組み・制度についての基本的な事項を学んでいく。特にスポーツやレジャーについては、事業の企画・実施・評価の方法・安全管理などについて、実際に模擬事業を展開する形式で実践的に学ぶことで、知識やスキルの修得を目指す。	
	スポーツ経営管理論	近年は、文化活動、経済活動としてのスポーツの組織をどのように形成し運営していくかが大きな課題となっており、まさに経営学的分析の社会的要請が高まっている。本講義においては、スポーツを事業として展開する組織の活動を、組織構造や環境、施設運営、消費者行動、マーケティング、スポーツ政策、リスクマネジメント、イベントの企画・実施、プロモーション活動といった様々な視点から取り上げ、スポーツ経営に関する知識やスキルの深化を図っていく。さらには、新しいテクノロジー（ICT）とスポーツとの関わりや活用の可能性についても言及する。	
	スポーツコーチング論	スポーツコーチの役割は多様であり、定義づけることは単純ではないが、サッカーコーチであるJ・モウリーニョは、指導者の役割を「選手自らでは到達できない領域に導くこと」と述べている。また、中学・高等学校及び大学運動部活動等、多くのスポーツ現場では、暴力やハラスメント等指導者に関する問題が根絶されたいと言いはない。本授業では、スポーツ指導者の役割について考え、必要とされる資質に関する基礎的な理解を獲得することを目的とする。	
	スポーツ社会学	スポーツ社会学は、スポーツで起こっている社会現象や問題を社会学の視点から理解し、解決する学問である。また、社会現象や問題を、スポーツを通して理解する学問でもある。本講義では、現代社会におけるスポーツの役割や機能、社会的な価値、スポーツ独自の問題点を取り上げ、スポーツを専門に学ぶ学生の基礎的な知識の習得を目指す。また、スポーツ社会学で習得した知識をスポーツ経営学やスポーツビジネスなどの分野に応用できる能力の涵養も目指す。	
	加齢と老化の科学	加齢に伴う人間の変化は、加齢そのものが要因となり、身体機能の低下をもたらすものから、加齢に伴う生活の変化により身体機能が低下するものに分かれる。多くの身体機能変化は、加齢自体が直接的な要因ではないため、生活習慣の改善によって向上するものが多い。特に筋機能に関しては運動習慣を改善することで大きな効果が期待出来る。本講義では、地域、ライフスタイルを加味した、加齢に伴う身体機能変化と改善のための方法について学修する。	
	フィットネス概論	人間は、身体に対して意図的な動きによる働きかけにより、フィットネスを変化させることができる。この意図的な働きかけをトレーニングと呼ぶが、そのプログラムが適切であったか、トレーニングが計画通りに行われたか否かを判断するためにはフィットネスの変化を測定・評価することが不可欠である。本授業では、フィットネスに関わる身体の仕組みとその測定・評価方法、トレーニングの進め方について科学的知識を学ぶ。これらの知識は、今後、スポーツを志し、身体能力を向上させたいアスリートにとって有用であり、生活やスポーツに応用できる力を学習する。	
	コンディショニング演習	スポーツを実践する際、選手個人のピークパフォーマンスの発揮に必要な要因は、多岐に渡る。その様々な要因を、ある競技目標に向かって最適な状態に適応させていくことを「コンディショニング」と呼ぶ。コンディショニングには、トレーニング方法の実践だけでなく、日常の栄養摂取や休養の状況などからも多大な影響を受ける。本授業では、効果的かつ実践的なコンディショニングに関する知見を経験的に学習しながら習得することを目標とする。	
	スポーツ人類学	スポーツ人類学は、文化人類学（民族学、民俗学）の方法によって、スポーツを研究する分野である。これまで、スポーツと文化は別、スポーツは文化ではないと考えられてきたが、スポーツ人類学が目指すのはスポーツを文化として分析、考察することである。食文化や生活文化といった言葉を近年よく耳にするようになったが、今日では「文化」は人が生きるために開発した社会的約束事の全体と理解されるようになった。日本語やドイツ語といった言語、あいさつの仕方、神に対する心的態度などなど、我々の日常はこうした約束事（その多くは誰がいつ創ったかわからないが）によって営まれている。こうした文化理解は文化人類学の文化概念が一般に受け入れられた結果であり、本科目では、こうした視点からスポーツを照射し、その文化としての在り方について考える。	
	ダンスと教育	ダンスは世界中で愛される身体運動であり、情感を揺さぶる文化としての身体運動表現である。また各種のイベントでもダンスそのものが主人公であったり脇役であったりする。このように昨今では重要なツールとして位置づけられる運動文化でもある。また、ダンスは身体と心を刺激する機能も有し、その教育的効果は大いである。本科目では、ダンスの「歴史・文化・教育・心理」的特性を踏まえ、心と体を一体として捉える面からも学習し、教育に活かす実践的な方法も学ぶ。	
	アダプテッドスポーツ論	アダプテッドスポーツとは、障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す言葉であり、本来は1人1人の発達状況や身体条件に適合させたスポーツという意味である。本授業では、コミュニケーションを基本として、私たち自身も学びながら、障がい者と共にスポーツを楽しむという姿勢を実際のスポーツを実践しながら学び、スポーツのルールや用具を障がいの種類や程度に適合（adapt）させることによって、障がいをもつ人はもちろんのこと、幼児から高齢者、体力の低い人であってもスポーツに参加することが可能になることを学んでいく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
スポーツ科学科専門科目 専門教育科目 発展科目	スポーツビジネス論	スポーツ産業は、様々な異業種が関連している複合産業である。本講義では、スポーツビジネスが複合的に形成されている市場の中でどのように事業が展開されているのか、またはスポーツビジネスの事業特性について取り上げる。具体的に取り上げるトピックは、プロスポーツ、アマチュアスポーツ、スポーツ用品、フィットネス産業、スポーツスポンサーシップなどである。これらの事例を紹介しながら、スポーツビジネスの知識習得を目指す。	
	地域スポーツ政策論	スポーツは、ビジネスツールとしても人々に与える社会・経済的効果が期待されているが、公共財としての役割も担っている。その意味では、地域活性化のツールとしても期待度が高い。本講義においては、地域社会におけるスポーツの在り方や活用方法についての基本的な事項を学んでいく。特に地方自治体のスポーツ政策について、磐田市の取り組みを示してもらいながら、総合型地域スポーツクラブのあり方や活動が地域社会に与える影響についても言及してもらおう冠講座としての授業を行う。	
	救急処置法	救急法とは、いつ、誰に、何処で起こるかかわからない突発的な傷害・疾病に対して、できる限り早く、その場の持ち合わせのものを使って、正しい手当をすることであり、First Aid（第一の援助）と言われる。実際の緊急場面では、まず重症度（緊急度）の判断や症状の経過判断などの確な判断を下し、続いて蘇生法、包帯法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法などの処置を正確に選択・適用しなければならない。本講義ではオムニバス方式により以下の内容を中心に授業を行う。 (オムニバス方式/全14回) (13 中井 真吾/7回) 実際の各場面における的確な判断方法や正確な処置技術を理論的に理解する。また、医師が担当する実践内容の体系化を図る。 (50 山崎 薫/1回) ・けがに対するファーストエイド：脳震盪、三角巾による包帯法の講義と実技 (51 猿川 潤一郎/2回) ・けがに対するファーストエイド：骨折と捻挫のRICE処置法の講義と実技 ・けがに対するファーストエイド：熱傷、創傷、薬物腐蝕、歯の脱落の対応 (52 鈴木 隆辰/2回) ・成人の二次救命処置概論 ・病気に対するファーストエイド：ショック症状、気管支喘息、アナフィラキシー、けいれん、低血糖、脱水、回復体位の講義と実技 (53 大石 崇人/2回) ・けがに対するファーストエイド：出血時の止血法、四肢の包帯法の講義と実技 ・けがに対するファーストエイド：副子と使用方法：副子の種類と使用方法の講義と実技	オムニバス方式
	アスレティックトレーニング論	アスレティックトレーナーは、トップアスリートからスポーツ愛好家まで幅広い対象者に対して、スポーツ活動を行う際の安全を提唱する重要な役割を担っている。本授業では、起源や歴史的背景を踏まえ、アスレティックトレーナーが担う役割を理解するために具体的な活動内容を示す。スポーツ活動時に起こりうる外傷・障害・疾病のリスクマネジメントとして、突然死や重症外傷、疾病等の理解と緊急時の対応計画の立案を学ぶ。また、外傷受傷時の応急手当やテーピング、スポーツ傷害評価に基づいたリハビリテーションの理論と実践方法について学習する。特にスポーツ活動においては、外傷・障害を予防することが重要視されており、機能的動作スクリーニング及び環境の評価方法を知ることによって受傷リスクを抑制できることを学習し、スポーツ活動を安全に行うための基礎的な知識を養う。	
	運動生理学実験演習	各種の実験・測定を通じて、身体運動が生み出される仕組みや身体運動そのもの、さらには運動による身体の応答を理解するための知識を身に付ける。運動生理学分野の研究で用いられる最先端の測定機器（超音波診断装置や筋電図装置、電気刺激装置など）やコンピュータを使い、履修者が検者・被験者として測定し、理論的背景を理解した後、実験・測定を行い、データを分析し、結果を解釈するという流れを通じて、身体で生じている現象を客観的に評価する。また、統計学等を使ってデータを適切に処理し、図表を用いて分かりやすく表示する方法を学ぶ。各テーマに関する理解度は、レポートや口頭試問によって確認する。運動生理学分野における研究の一端を学習することを通じて、論理的思考力、表現力及び文章力を身に付けることを目的とする。	演習100分×10週 実験100分×4週
	臨床心理学	臨床心理学は、異常行動や不適応行動など精神発達や環境への適応に関する問題について、心理学的な知識と技術によって心理診断及び治療的介入・援助を行うための学問として発展してきた。情報技術の急速な発展や少子高齢化、大規模な自然災害の多発など社会状況が激変する現在、心の問題は社会全体に広がっており、臨床心理学の役割はますます大きくなっている。本講義では、心理診断と心理療法及びこれに準ずる具体的な心理学的援助を行う理論と技術の体系と共に、個人の行動や適応の障害について測定・分析する手法について学ぶ。心理的援助の知識と技術を学修すると同時に、各自が自らの心の成長について考える契機としていきたい。	
	スポーツマーケティング論	現代のスポーツは急速に産業化し、多様化している。一昔前には単なる遊びであったテレビゲームが、今やeスポーツとなり、スポーツの1種として考えられるようになりつつある。このように急速に発展するスポーツを事業とするには、消費者を満足させ、利益を継続的に生み出していくビジネスモデルが必要である。スポーツマーケティングは、ビジネスモデルを構築するための基礎となるものである。本講義では、スポーツマーケティングの重要な理論と概念、そして実践方法についての知識を習得することを目標とする。消費者行動、情報システム、スポンサーシップなど多岐にわたるトピックを扱うことで、スポーツマーケティングの基本的な理解を深める。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
スポーツ 専門教育科目 発展科目 スポーツ 科学科 専門科目	スポーツ行政論	我が国ではスポーツ庁が新たに設立された。設立以前は、体育は教育行政として文部科学省が、健康づくりなどの問題は厚生労働省が担当していた。スポーツ庁の設立は、スポーツが新たな行政の仕組みとそのガバナンスの手法を必要とすることを意味するものである。本講義では、我が国のスポーツ行政の仕組み、国民（地域市民）の健康や幸福を促進するためのスポーツプロモーションの施策について取り上げる。また、それらの施策を立案・実行するためのスポーツに関する財源についても取り上げる。	
	スポーツイベント 企画運営	スポーツには、私達の身体を健康にしてくれたり、一緒に行う仲間との関係を良好にしてくれたり、さらには社会全体の活力を生み出したりする力があると言われていいる。そのスポーツをイベントとしてマネジメントすることは、スポーツの価値を高めることにつながる。この場合、イベント対象となるスポーツの種類や対象によってその価値形成の方法は大きく異なり、そのことを認識せずに単にイベントを行ってもそれはスポーツのもつ価値をかえって損なってしまうことになる。ここでは、マネジメントの視点を基本として、スポーツイベントで求められる知識や分析方法を学んでいく。本授業では、静岡県西部地区の企業・組織等の協力を得て、全国レベルのイベントと地域でのイベントの事例を紹介しながら、スポーツイベントの企画や運営の実態を学んでいく。	
	スポーツデータ解析	近年、IoTの発展と共に様々なビッグデータが入手可能となり、ビジネスの分野では「ビッグデータを制する者がビジネスを制す」と言われるほど注目を集めている。スポーツの分野に於いてもIoTに加えてGPSや映像解析技術を活用することにより様々なデータが入手可能となっており、それらを用いた選手のコンディショニング管理や戦術分析などが始まっている。今やスポーツの分野でも「データを制する者が試合を制す」と言っても過言ではない。これらのデータを入手し、そこから有益な知見を科学的に得る為には、統計学の基礎知識が必要不可欠である。そこで本講義では様々なスポーツのデータを用いて、記述統計学、推測統計学、多変量解析の基本を学ぶことにより、スポーツデータ解析の基礎を身につける。	
	トレーニング演習	本講義では、フィジカルトレーニングの指導を行う人間が、様々な対象に合わせてトレーニングプログラムを作成することができるように、トレーニングの技術だけでなく、理論的背景を用いて各トレーニングについて学習していく。近年、競技スポーツにおけるパフォーマンス向上のみならず日常生活動作や健康増進のためにフィジカルトレーニングを行うことが一般的になってきている。 (オムニバス方式/全14回) (6 中西 健一郎/7回) SAQ（スピード、アジリティ、クイックネス）や柔軟性、スタビリティ等を高めるトレーニング方法の実際について学習する。 (8 館 俊樹/7回) フリーウェイトやトレーニングマシンを用いたトレーニングの実際について学ぶ。	オムニバス方式
	リハビリテーション論	社会一般に浸透してきているリハビリテーションについて、より深く、より広く理解するために、リハビリテーションの概念や定義、リハビリテーション医学・医療の歴史、リハビリテーションの流れを理解し、その実践にあたって必要となる基礎的知識と進め方の習得をねらいとする。スポーツ活動を行う若年層に多い代表的な外傷・障害（スポーツを含む）や高齢者に多い疾病を学び、それぞれに対する身体構造の破綻や機能の低下を動作スクリーニングや検査を通して評価する手法を学ぶ。また、評価に基づく運動療法、物理療法、補装具療法、環境設定などの適切な方法を学習することによって、健康・スポーツ関連指導者として、リハビリテーションにどのように関わらべきか、役割を自ら考える基盤を形成する。	
	認知動作型 トレーニング演習	運動は、脳が指令を出し、筋肉を動かすことによって成り立つと考えられている。しかし、筋肉は必ずしも脳の作用のみに従属して働いているばかりでなく、運動やさまざまな動作することが脳の働きを活性化することが明らかになってきた。この講義では、「認知動作型トレーニングマシン」を実際に用いた実技を含めながら、運動がいかに脳の働きと関係しているかについて学習する。また、ランニング能力の改善（例えば速く走る）など、自らのスポーツパフォーマンスを向上させるからた使い方を身に付ける。また、トレーニングによってどのような変化が生じるかについて学び、認知動作型トレーニングが、人間の健康やスポーツパフォーマンスの向上になぜ有効なのかを学習する。	
	スポーツパフォーマンス の分析	近年、競技中のパフォーマンス分析はめざましい発展をみせている。サッカーやラグビーでは試合中の走行距離やスピード、スプリント回数からボール保持時間がリアルタイムで計測され、米国野球リーグでは、各選手の走類似だけではなく、守備時の走スピードから打球のスピード、方向、回転数などが計測されている。このような技術の発展により、各競技に関連するパフォーマンスがより詳細にわかるようになっていく。本講義では、担当者それぞれの専門分野の視点から題材を提供し、多面的な最新の分析を活用したスポーツパフォーマンス等の向上を学んでいく。	共同
	スポーツイベント 企画運営演習	スポーツイベント企画運営の授業をベースとしながら、実際のイベント企画を実習として学ぶ。ここでは、静岡県西部地区に拠点を置く諸組織の協力を得ながら、それらの組織が実施するスポーツ関連イベントを実習の場として、どのようなマネジメントとマーケティングが必要となり、どのように実践されているかを現場の実務者と学生とが一体となって実習を行う。イベントを企画し、実践し、運営するという実態にコミットすることにより、スポーツマネジメント、スポーツマーケティングの実際を学習する。	
スポーツデータ解析演習	近年、スポーツにおいても競技における身体や運動あるいは戦術に関わる多くのデータの分析が行われ、またその結果が競技力向上に役立てられるようになってきている。たとえばGPSや映像解析技術を活用することにより様々なデータが入手可能であり、それらを用いた選手のコンディショニングや戦術分析などが始まっている。そこで本演習では様々なスポーツの素データを用い、実際にコンピュータを操作しながら、記述統計学、推測統計学、多変量解析の基本を学ぶことにより、スポーツデータ解析の具体的な手法を身につける。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
発展科目 スポーツ科学科専門科目	保健体育科教育法Ⅰ	<p>本授業では、保健体育科教育について、教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された保健体育の学習内容について理解を深めると共に、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。その際、生徒の実態を視野に入れることや、情報機器や教材の効果的な活用法を理解した授業設計ができるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(5 高橋 和子/7回) 教科「体育」では、「体づくり運動・器械運動・陸上競技・水泳・球技・武道・ダンス・体育理論」の学習内容と指導上の留意点を理解すると共に、よい授業と評価される映像視聴を通し、その要因や学習指導案の構成についてグループワークを通して学習する。</p> <p>(7 和田 雅史/7回) 教科「保健」では、「健康な生活と疾病の予防、心身の機能の発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境」の学習内容と指導上の留意点を理解すると共に、授業作りのための基本的概念である教材研究の進め方やこれまで優れた授業実践と評価された授業のいくつかを取り上げ、その方法と技術について学習していく。</p>	オムニバス方式
	保健体育科教育法Ⅱ	<p>本授業では、保健体育科教育について、学習指導要領改訂(2017年・2018年)の経緯や基本方針・ポイント、「3つの資質能力(知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等)」並びに、個別の学習内容と評価、指導上の留意点について理解を深める。さらに、情報機器を積極的に活用して各分野の特質に応じた授業設計と学習指導案を作成することができるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(5 高橋 和子/7回) 教科「体育」では、7つの運動領域の各特性や魅力を理解すると共に、「個に応じた指導の充実」「障害のある生徒への配慮」に基づく、指導の実際について、グループワークを通して検討する。また、小学校・中学校・高等学校の学びの系統性を踏まえた授業設計を理解することができるようにする。</p> <p>(7 和田 雅史/7回) 教科「保健」では、学習指導要領及び学習指導要領解説、さらには中学・高校で使用されている教科書教材を検討する中で、授業で扱う基本的内容の理解をすすめながら授業作りへの準備を行う。</p>	オムニバス方式
	保健体育科教育法Ⅲ	<p>本授業では架橋科目の位置づけとして、学習指導要領に示され保健科教育並びに体育科教育で扱われる学習素材をどのようにして教材化するかの具体的方法の学習を展開する。「体育」では、「体づくり運動・器械運動・陸上運動・水泳・球技・武道・ダンス・体育理論(体育に関する知識)」などの教材化、「保健」では、中学校においては「心身の機能の発達と心の健康」「健康と環境」「傷害の防止、健康な生活と疾病」、高校においては「現代社会と健康」「生涯を通じる健康」「社会生活と健康」などの教材化について学習させる。学習指導案の基礎や実際の授業で活用する教具やICTの活用についても学習し、学習指導案作成やマイクロティーチングなどをグループワークを通して教材作成・授業設計・授業遂行の能力を高める。</p>	
	保健体育科教育法Ⅳ	<p>本授業では、学習指導要領及び学習指導要領解説保健体育編の趣旨を踏まえながら、各自が模擬授業実施とその振り返りを行い、コミュニケーション能力や論理的な思考の育成を図ると共に、情報機器の活用を含めた教授技術の向上を目指す。主に、学習指導案の作成と教科内容の指導方法に関わる知識と技能について、実践的に修得する。また、体育分野と保健分野で示された内容について相互の関連が図れるように留意する。さらに、「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」について理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(5 高橋 和子/7回) 「体育」では、「体づくり運動・器械運動・陸上運動・水泳・球技・武道・ダンス・体育理論」の目標・内容・指導方法・評価を明示し、模擬授業実践後の振り返りも重視する。</p> <p>(7 和田 雅史/7回) 「保健」では、指導計画、指導案の作成、板書計画などの授業作りの基本を学んだ後、中学高校の内容に沿った模擬授業を行い、授業後の授業評価を通じてお互いの実践力を高めていく。</p>	オムニバス方式
実技科目	水泳	<p>この講義では、以下の3点を柱として、水泳の指導スキルを身に付ける事を目標とする。①泳法を理解・習得し、習得に向けて効果的に段階的な指導ができるようになる。②水難事故の予防や回避の為に知識とスキルを身に付け、その指導ができるようになる。③水の特性を活かし、健康や競技のための活用法を紹介、指導できるようにする。泳法では基本の4泳法(ターンやけのびなども含む)と共に、救助法や水難事故の際にも役立つ泳ぎや指導の際に興味を惹く技などを学ぶ。水の物理的、生理的特性を学び、プールでの事故や怪我を防ぎ、水難事故を予防・回避できるようにする。また水の特性を活かして、健康や競技のための、コンディショニングやリラクゼーション、怪我予防などの水中運動についても学ぶと同時に指導法を身に付ける。</p>	
	球技 (バスケットボール)	<p>バスケットボールのルールや戦術的特性について理解すると共に、基礎的な技術を習得するよう授業を実施していく。また、ゲームやチームでの活動を通じて、社会性の獲得を促し、将来にわたってスポーツを実践する態度の涵養をめざす。したがって、①バスケットボールのルール、専門用語、戦術的特性について理解し、適切に説明できるようにする②バスケットボールの基礎的な技術を身に付ける③コミュニケーション能力等の社会性や生涯スポーツの実践を支える基礎的な力を身に付けることができるようになること及び指導法を身に付けることが本授業の目標である。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
スポーツ 専門教育科目 実技科目 体育科専門科目	武道（柔道）	柔道は、稽古の積み重ねを通して、瞬発力、持久力、調整力などを養うことができ、さらに相手と格闘し合う対応の中で旺盛な気力、礼儀、克己、公正、遵法などの態度を養うことが期待できる。柔道は、嘉納治五郎が、我が国の伝統的な武技の一つであった柔術を新しい原理のもとに集大成して創始したものであり、その目的とするところは、相手との稽古等を通じて身体や精神を鍛錬修養し、それによって自己を完成し、社会に役立つ人間を育成するところにある。この考え方は、柔道の教育的な意義を強調すると共に、心身の発育・発達への効果面を重視している。ここでは、こうした柔道の心身の発育・発達への効果を重視した授業を行う。技術内容としては、立ち技・寝技・崩し・受け身などであり、授業において、技術レベルに応じた練習及びその指導法について身に付ける。また、試合の行い方、審判法、競技会の運営の方法についても身に付ける。	
	体づくり運動	体づくり運動は、「体ほぐしの運動」「体の動きを高める運動」「実生活に生かす運動の計画」から構成されている。体ほぐしの運動では、手軽な運動を行い、心と体は互いに影響し変化することや心身の状態に気付き、仲間と自主的に関わり合うことを学習する。体の動きを高める運動では、体の柔らかさ、巧みさ、力強さ、動きを持続する能力を高める運動を行うと共に、それらを組み合わせる運動を学習する。実生活に生かす運動の計画では、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための運動の計画を立てることを学習する。併せてそれらの指導法を身に付ける。	
	陸上競技	陸上競技は、走・跳・投運動の種目から成り、これらの運動で必要となる技能は他のスポーツを堪能するためにも欠かせない。またこれらの運動を通して身に付ける動作や技能は生活上にも大きな役割を果たしている。本授業では、これら種目の中の代表的な短距離走、走り幅跳び、走り高跳び、砲丸投げ、あるいはハードル走などの練習方法や競技方法・用具の扱いや管理、安全な運動実践の方法などを学び、かつこれらの指導方法を身に付ける。	
	ダンス	身体表現のもっとも代表的なダンスは、古来から近現代においても、生活や文化に欠かせないものになっている。それらの背景を踏まえ、他者やものと身体でかかわる視点や、コミュニケーションツール（自己表現）の視点から、ダンスを考察する。具体的には、ダンスの素材である身体、リズムや動きの探求などを通し、ダンスの基礎的スキルを学習する。その後、創作ダンスを舞台上演するための創作技能、上演技能、作品創作や舞台上演の知識を学ぶと共に、各役割に対して責任を持ち舞台に立つことを目指す。また、能力レベルに応じた指導の方法を身に付ける。	
	器械運動	本授業では、マット、跳び箱、鉄棒などの器械や用具を使用して、それぞれの特徴を生かした基本的な技術や、練習方法及び理論について学ぶ。その際に、学習者自身が自己の身体の動かし方に意識を持ち、創意工夫しながら、「できない」ことを「できる」ようにすることが重要である。また、個人の技能レベルに応じた技術習得だけでなく、実践を通じて運動を多角的に理解し、他者の運動に対しても適切なアドバイスや補助ができるようになることを目指し、かつ指導の方法を身に付ける。	
	球技（サッカー）	サッカーは多くのスポーツ種目の中で最も愛好する人口の多い球技であり、学校を始めとして地域社会でも多くの人々が実践している。本授業では、ボールを止める（トラップ）・動かす（ドリブル）・蹴る（キック）などの基礎的技術を習得すると同時にその効果的な練習法を学ぶ。また個人戦術・グループ戦術を学び、さらに守備と攻撃の方法についてもタスクゲーム（ミニゲームなど）を通じて理解し学習する。またこれらの指導法を身に付ける。	
	球技（バレーボール）	ルールや場の設定を工夫した練習またはゲームを通して、バレーボール初心者に対する指導方法を実践的に学修する。技術・戦術の練習方法や指導ポイントを説明できるようになるだけでなく、基本的な指導技術（簡単な見本、球出しなど）も身に付けるようにする。授業後半のリーグ戦では、自チームの課題を客観的な指標（スパイク決定率、ディグ成功率、サーブ効果率など）に基づいて分析し、その結果から技術・戦術の練習方法を考案する力を養う。	
	球技（テニス）	テニスはネット型の球技としての典型教材であり、子どもから高齢者までがその発達段階や体力・運動能力に合わせて行うことのできるスポーツである。本科目では、テニスの歴史やルールを学んだうえで、ストローク、ボレー、サーブの技術の習得を軸とし、発展的なプレー（パッシングショット、ネットプレー、サービスアンドボレーなど）の習得も試みる。また、練習の方法、シングルスやダブルスなどのゲームの行い方などを学習すると同時に、それらの指導法を身に付ける。	
	野外活動実習	人間は本来、自然と共に生きてきたが、都市化が進んだ現代社会では自然を体験する機会が減少している。本授業においては、野外活動を通して自然への興味・関心を高め、社会性を育む団体での行動、自然との調和の必要性、野外活動のあり方について体験的に学習していく。具体的には、大学キャンパスや周辺施設を活用したオリエンテーリング、環境学習活動が中心となる。体験や協調性を重視し、野外活動をより創造的に行うためには何が必要なのかについても考えていく。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	全学共通科目 特殊研究科目	専門演習 A	教員や大学、地域の諸機関が設定するプロジェクトを通して、専門分野の研究に関するスキルの基礎などを、学生が能動的に学修する授業科目である。同Aは主に「スポーツ科学」を扱う。授業では、教員が自らの専門領域をベースとして、研究・分析の仕方などを説明する。次にプロジェクト（企画・運営テーマ）を設定する。学生は単独または共同で計画を立て、当該プロジェクトを実行する。教員及び学生はそれを評価し、スキルの改善につなげる。学生は、このようなPDCAサイクルを通して、研究・分析の基礎を修得する。	
		専門演習 B	教員や大学、地域の諸機関が設定するプロジェクトを通して、専門分野の研究に関するスキルの基礎などを、学生が能動的に学修する授業科目である。同Bは主に「スポーツ実技やスポーツに関連するさまざまな活動」を主教材として、スポーツ諸活動を展開できる実践力を養う。授業では、教員が自らの専門領域をベースとして、研究・分析の仕方などを説明する。次にプロジェクト（企画・運営テーマ）を設定する。学生は単独または共同で計画を立て、当該プロジェクトを実行する。教員及び学生はそれを評価し、スキルの改善につなげる。学生は、このようなPDCAサイクルを通して、研究・分析の基礎を修得する。	
		専門演習 C	教員や大学、地域の諸機関が設定するプロジェクトを通して、専門分野の研究に関するスキルの基礎などを、学生が能動的に学修する授業科目である。同Cは主に「調査・研究」を扱い、同Dと補完的に位置づけられる。授業では、教員が自らの専門領域をベースとして、研究の進め方や基礎資料の所在、研究倫理などを説明する。次にプロジェクト（研究テーマ）を設定する。学生は研究計画を立て、図書館や情報機器を駆使し文献や統計などを調査、結果を資料にまとめる。教員及び学生はそれを評価し、スキルの改善につなげる。学生は、このようなPDCAサイクルを通して、調査・研究の基礎を修得する。	
		専門演習 D	教員や大学、地域の諸機関が設定するプロジェクトを通して、専門分野の研究に関するスキルの基礎などを、学生が能動的に学修する授業科目である。同Dは主に「論述・発表」を扱い、同Cと補完的に位置づけられる。授業では、教員が自らの専門領域をベースとして、論文の書き方や発表時の注意事項、研究倫理などを説明する。次にプロジェクト（研究テーマ）を設定する。学生は研究計画を立て、調査を行うと共に、結果をレポートに論述し、発表する。教員及び学生はそれを評価し、スキルの改善につなげる。学生は、このようなPDCAサイクルを通して、論述・発表の基礎を修得する。	
		専門ゼミナールⅠ	3年次生を対象にして、専任教員が自らの専門領域をベースとして開講するゼミナール。参加学生と教員との双方向性・相互啓発性を基本として、大学における学修の多角的・重層的な役割を担って開講される。それは、本学部が掲げるディプロマ・ポリシーの実践であり、学生教育のミッションである。Ⅰは3年次前期に開講される。	
		専門ゼミナールⅡ	3年次生を対象にして、専任教員が自らの専門領域をベースとして開講するゼミナール。参加学生と教員との双方向性・相互啓発性を基本として、大学における学修の多角的・重層的な役割を担って開講される。それは、本学部が掲げるディプロマ・ポリシーの実践であり、学生教育のミッションである。Ⅱは3年次後期に開講され、Ⅰと同一教員が開講するゼミナールの履修とする。	
		卒業研究	3年次での「専門ゼミナールⅠ・Ⅱ」を経て、そこでの学習と研究の成果を卒業論文として纏め、発表するための個別・集団指導の授業。基本的には、卒業研究の指導教員の専門分野に関わった研究を行い、自らの設定したテーマに関する研究を行い、卒業論文として纏める。ただし、提出前の発表プレゼンを課し、発表しない学生には単位を与えないものとする。	
教職関連科目	教職入門（教師論）	本授業では現在の教師に求められる役割を理解し、教師となる意欲を高めると共に、教師として成長するために必要な知識、並びに意識や姿勢を獲得する。まず、現代日本の学校教育の意義と、そこにおける教師の役割と教職の社会的意義について理解する。次に、これまで社会が教師にどのような役割を求め、それがどのように変化してきたのか（教師像の変遷）を概観し、そこから現在の教師に求められる役割と、役割の重要性について理解する。さらに、具体的な事例を通して現在の教師の職務内容の全体像を理解し、学校に期待される多様な課題に対応するための同僚間連携や地域社会との連携などの必要性を学ぶ。		
	教育社会学	人間と社会の関係について、社会の中で人間形成の役割を担う教育の在り方を学ぶ。その際、教育によって、社会が人間個人を規定すると同時に、人間が社会を作っているという両方の視点からの関係性を把握することに努める。具体的には、まずは現代社会の状況を理解し、その変化が生徒や学校教育にもたらす影響と課題、それに対応する教育政策の動向を把握する。その上で、これからの学校の在り方について、地域との連携・協働の観点及び学校安全と危機管理の観点から学んでいく。		
	教育心理学	教育心理学には、学習・発達・適応・評価という4本の柱がある。この授業では、その4つの柱について、①児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程に関する基礎的な知識を身に付け、②各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解し、③児童及び生徒の心身の発達に対する外的及び内的要因の相互作用、発達に関する代表的基礎理論を学び、④学習評価について考察していく。そのために必要な、様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的心理学理論を紹介する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職関連科目	特別支援教育総論	インクルーシブ教育システムを含めた特別支援教育の制度や理念を歴史的視点から理解し、障害の概念、教育の場、自立活動を含めた教育課程・教育内容についての基礎的な知識を学習する。また、聴覚障害、視覚障害、知的障害、肢体不自由、病虚弱、発達障害などの障害のある生徒の心身の発達、特性と適切な支援方法について理解し、個別の教育支援計画や個別の指導計画の意義と作成方法を知る。さらに、特別支援教育コーディネーター、関係機関・家庭との連携による支援体制の重要性について学習する。また、日本語を母語としない外国籍や貧困家庭、被虐待などその他支援の必要な生徒についても理解し、対応の必要性や方法を知る。	
	教育課程と方法	本授業では日本の学校教育の教育課程を学習指導要領の変遷を中心に概観し、歴史的、社会的な視点から現在の学習指導要領の内容とねらいを理解する。また、学校での教育課程（カリキュラム）編成に関する代表的な考え方を提示し、現在の学習指導要領のねらいを踏まえたカリキュラム編成のあり方を具体的な事例をもとに解説する。また、学年や教科の枠を超えて教育課程をとらえ、地域や児童生徒の実態をふまえて学校全体としてカリキュラムを編成・実施・評価・改善する「カリキュラム・マネジメント」の考え方や重要性を理解する。	
	道徳教育	「道徳」についての理論的な理解を最初のステップとして、日本における道徳教育の歴史と学習指導要領の変遷を把握し、多様な視点から道徳指導についての考えを深めていく。そして、実際に教育現場で「道徳教育」を実践する際の基本的な方法論を獲得し、また道徳教育実践についての教材を開発することを通じて、よりよい道徳指導の可能性について考察を深める。毎回PowerPointによるスライドを使用する。授業内で質問をする時間も設け、自由な質問・討議を促す。授業は講義形式と模擬授業を含む発表形式の両方を取り、どちらも学生の主体的な参加により進めていく。	
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	特別活動及び総合的な学習の時間の意義・目標・内容について整理し、その指導の在り方について講義する。特別活動では、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」等の視点を持ち、活動の特質を踏まえた指導が可能となることを目指す。総合的な学習の時間においては、各教科を超えた学習内容に基づく探求的な学びを達成するための単元計画を作成し、指導内容を具体的に理解する。 (オムニバス方式／全14回) (6 中西 健一郎／7回) 特別活動の意義・目的・内容及び指導法 (10 佐藤 知条／7回) 総合的な学習の時間の意義・目的・内容及び指導法	オムニバス方式
	教育の方法と技術	本授業では、現在の児童生徒に育成すべき資質・能力について歴史的社会的な文脈から学び、その為に必要な教育方法について理解する。また、具体的な授業場面では教育内容や児童生徒の実情に応じて適切な指導の技術を用いる必要があることを理解し、授業の目標、用いる教材・教具、授業の展開、評価の観点等の要素を盛り込んだ指導案を自ら作成することで、授業づくりに必要な教育技術に関する基礎的な知識・技術を習得する。さらに、学校に導入されている情報通信機器の実情と、それらの利用に期待される教育的効果を知り、教育目的や内容に応じて必要な機器を適切に用いることの重要性を理解し、活用に必要な知識・技術を身に付ける。	
	生徒指導	生徒指導は、教育活動全体を通じて行われる学習活動と並ぶ重要な教育活動である。本講義では、組織的な生徒指導の実践に必要な知識・技能及び資質を獲得することを目標とする。教科における生徒指導、総合的な学習の時間における生徒指導、特別活動における生徒指導、生徒指導体制の組織化、生徒指導の意義・目的・内容及び指導法、教育課程における生徒指導の位置づけ、集団指導・個別指導の方法原理、学校運営と生徒指導などについて学習する。 (オムニバス方式／全14回) (6 中西 健一郎／7回) 生徒指導の目的について理解し、その方法や留意点について学習する。また、いじめや体罰など実際の生徒指導の現状についても理解を深める。 (57 久米 昭洋／7回) 生徒指導の現況及び歴史について学習する。問題行動の全体像を把握し、実際の生徒指導や進路指導に関する実践についても理解する。	オムニバス方式
教育相談	本授業は、①教育相談に関わる心理学の理論・概念、②不適応や問題行動のメカニズムとその対処法、③カウンセリングを中心とした個別・組織的な教育相談の進め方、の3点について実践的理解が得られるように授業を行う。授業の中で心身を落ち着かせるワークを活用し、計画に沿った授業を行う。また、講義形式に加えて協同学習形式の体験型授業を多く取り入れて、コミュニケーションスキルの向上も目指す。これらを通して中学校・高等学校での教育相談に関わる教育実践力を高めることを目的とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職関連科目	進路指導	<p>進路指導は、生徒が自ら将来を見据えてそれぞれの能力を伸ばせるよう、組織的・継続的な指導を行う過程を指し、長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。その中で、変化の激しい今日の社会にあつては、生徒に、能力向上を目指した生涯学習の必要性やよりよい社会の維持を支える人格形成の重要性を伝えることも重要である。このような社会的・職業的な自立を促す進路指導を行うために必要な考え方、ガイダンス・カウンセリング機能を含んだ指導方法の理論的・体験的習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(18 松永 由弥子／9回) 教育課程における進路指導の意義を十分理解できるように、生涯にわたる長期的展望に立った人間形成という観点からの進路指導・キャリア教育の意義、社会情勢や青少年の現状という進路指導の背景、進路指導・キャリア教育における体験活動・自己評価に関する意義ならびにポートフォリオの活用とガイダンスとしての指導方法の意義などを学習する。</p> <p>(25 野崎 英二／5回) 学校教育における進路指導のあり方の全体を理解できるように、教育課程における進路指導・キャリア教育の位置づけ、学校の教育活動全体を通じた進路指導・キャリア教育の在り方、組織的な指導体制づくり及び、インターンシップやキャリアカウンセリングの現状と意義などを学習する。</p>	オムニバス方式
	事前事後指導	<p>教育実習の意義について理解するために、事前指導では学校教育現場における実践的な教育活動に参画する意識を高める。また事後指導では、実際に教育実習を通して得た実践的且つ応用性の高い知見を学生間で共有し、教員免許取得までの時間の中で習得すべき知識・技能を理解する。</p> <p>事前指導／7回：教育実習の意義・目的・内容及び現状理解、教育実習生として遵守すべき義務、観察・参加の基礎基本の習得、授業づくりの基礎基本の習熟、自己課題の明確化を行う。 事後指導／7回：教育実習を経て得られた成果と課題を学生間で共有する（グループによる発表等）。また教育実習を経て獲得された教育実践での知識の明確化と実践的な教育観・教職観の形成を行う。</p>	共同
	教育実習Ⅰ	<p>教育実習は、これまでに積み上げてきた教養、学問的知識や思考方法、教育に関する理論や専門知識、教育事象についての研究的態度や研究方法などを、現場教職員指導の下で、教職従事者の主要な活動領域における実地体験を通して検証し、応用する機会である。教職課程での教職に関する科目・教科に関する科目において学んできた専門知識と技術を統合し、高等学校において2週間の実習を行い、実際の教育現場での体験を経て教員としての実践力を養う。</p>	
	教育実習Ⅱ	<p>教育実習は、これまでに積み上げてきた教養、学問的認識や思考方法、教育に関する理論や専門知識、教育事象についての研究的態度や研究方法などを、現場教職員指導の下に、教職従事者の主要な活動領域における実地体験を通して検証し、応用する機会である。教職課程での教職に関する科目・教科に関する科目において学んできた専門知識と技術を統合し、中学校において3週間の実習を行い、実際の教育現場での体験を経て教員としての実践力を養う。</p>	
	教職実践演習（中・高）	<p>教職に関連する科目及び教育実習等を経て獲得した体験的かつ実践的な知見との関連について省察し、自らの教育者としての特性について分析する。また、学校教育現場における今日的な課題に対する分析や、その対応方法などについてディスカッション形式を通して学びを深めていくことを試みる。本授業により、これまでの教師としての資質獲得を目指した学習を総括し、教育者として必要な知識、技能、心構えを向上させ、実際に教師となった後の自己研鑽についても理解を深める。</p>	